明治六年三月新刻

西洋いろは

寧静學人著

養愚堂藏版

東京書肆 中外堂藏版

国立国会図書館
25.9.19
212743

序

古の書に二集五集を兎角神佛より合おほ
ほ毛絶が群の人うは晨夏孫人化学は
束櫃とも学りしに学れ世令の所代了
之れ癒らしき漢設新う孫説伊亞亞拉
寄誌も毛も奥と思わ知は美好言葉の
屋経を寇め西洋より遂て人も事れと
の殿解りし毛人自関社事 西自あ

学ぶを悔の因業とは苦比喪その弱化
身その人を憂とんとしてらんうせい
ひく怪異よ笑ふもて毒なる事と思ひ
しきらちもの思知あるしに作あり時
ふ接ふ事四集よりも実説と綴るしに先
兎し角も二三集の不成あり事けかき
掛事度度云ふ番
二五ごろも寺二月　寧静学人識

西洋夜話第三集目録
太維徳以斯来爾國王と称する事
附　蘓魯門智畧の事
神殿建立の事
附　斯波國の女王蘓魯門を訪ひ
来る事
以斯来爾滅却の事
附　後世外國の管轄を受る事

伊里亜天より登る事
附 打戻児狗洞へ入る事

西洋夜話第三集目録畢

西洋夜話第三集

東京　寧静學人著

太維德以斯来爾國王となる事
附 蘓羅門智略の事
却説羊牧太維德をピリスチ子の長人護力亞士を討取て大國中に人よ譽を得て太維德と尊こと敬ふ者多けれハ國王蒙児をおれと妬うて太維德を殺

さんと世一と度々かり然もと國王蒼
兒の子如拿丹ハ太維德を愛をると兄
第よりも甚しく真よ睡うり々もとも
蒼兒生活の間々始終囚獄よのみあり
ゆるゝ蒼兒ハ治世二十四年にて又
ピリス千子人よ攻らもて義兒婆山の
大戦よ打敗て終よ討取れ太子如拿丹
も同一軍よ討死しゝもは太維德を國

王蒼兒の姫よりて樣々難儀を受け
恨ゆる者ゆもとも今度蒼兒ゝ敗軍の
事を聞日夜泣沈みて之ゝ為に喪を服
しゝありといゝ時ゝ以斯来爾の國人を
國王父子の戰死したるゝより十二部
各君を撰みゝるよ獨太といゝ郡して
は太維德を立て王と尊めゝ其後
遂よ十二部ともゝ太維德を王と尊め

しよりいにしへ斯来爾國王となりしより然れと太維德を多く軍陣の為に歳月を送りしに勝利多くありけるを二の勇將ふりして大に世人の賞譽を得しり実に隣國に打勝て國境を廣めいにしへ斯来爾の武威と輝うしたる事ハ其後ハ此時より盛なるはなしいと見み太維德の武德なりとぞ

維德ハ只武道を以て一時國を富したるのみにあらず又文德ハ世に其名譽を後世に残り世界のあらん限り朽ることなしそ何といふに太維德ハ天性の詩人にして義しき言葉を以て斯来爾の經文を作りなれし太維德王世に出てより古のうる歴世の人〻神と辯むに皆その經文と續りし太維德王

祖ありてより今弼治し三千年ホ至ると
も猶信心者を神と稱むる太維德王の
美しき言葉を國内
斯て太維德を以斯來爾國王とかりて
四十年の間政令を行ひ國民と統轄し
けるといたる年老て後その國れ都を
ルセレムといふ所なる王宮にて命數
を全して祖ひ以斯來爾國を太子蘓

魯門に譲らるけれハ茅出度即位あり
あるとぞ此頃蘓魯門太子いまだ幼少
ましましけるとぞ成人のひて後よりを
却て賢明ましまくるを云ふの太子即
位の後程なく二人の女一人の男子
と抱きて王の前よ出て訴入る者あり
何かる事よや此女輩ハ両人ともホ
一人れ赤子と互ひ爭

212749

闘ひ久るう其勢もけしく誤て子とも
蹈殺しやせんと見る計すて真の母
も何もうや更ふ見分くつきやうもな
ありけれも蘇魯門左右と顧うて剣と
爰ふ持参れと命々もハ麁従の者直ふ
剣を持ち来るよそ蘇魯門再ひいひけ
るやう手今何もとそれとも定めぬ
きハ何も罪よ落しうさし依て其爭

の種なる赤子を二人よ等しく分ちて
取せんいざ其赤子を真二よ切て二人
比女よ半分つ取せよと指揮しける
ふ麁従の者うの剣を引抜ハ一人の
女驚き立て飛出し赤子を其身ハ蔭よ
隠し泣きひて云々るやう何率此子
を助け彼悪婦ふ渡してたゝ只此子と
教さよ置き賜し悪婦この子ハ母

とかるとも決していとひ申さじといふを真の母かるゝ〜又一人の女ハ御
の赤子を憐むを衆色なくして云々る様
只正理の審断を願ひ奉るのみなれ〜
は赤子を二ツよ切て賜る〜妾ハ半分
にて更よ異存なしといふよ蘓魯門を
二人の様子を熟と視て真の母親と知
り殺さるを置て賜はれといひまる女ハ

赤子を与ける〜よ果して真の母なりあ
るとを少き王よは珍らしき英断なり〜
ハの一事よても蘓魯門王の賢明を知
るハ足〜

神殿建立の事

附斯波國の女王蘓魯門を訪ひ
来る事

再説先王太維徳を國を強くし民を富

して以斯来爾と其濱の一大國と為し金銀財寶國中に満々たり太雅德王その都かるゼルセレムに美觀なる神殿と建立して天神を祭る所とかさんと頻に其用意を催しけるとも未成就せそして狙りタヘ王の代に至りて神殿成就し事といふ色し仰以斯来爾人埃及國を立出てより以来四百八年にかりけると其間に一ツとして神を祭る為に建さる殿堂かし此度神殿を建立しそるを國をしまりてより秘ての事かり蘇魯門王ての神殿と建うけるとき材木不足かれハ去る拔調の人る工夫を事ふに其頂以斯来爾の都ゼルセレムの北に當り地中海の岸にタイレとて賀

易盛なる大都會あり是をプリヂシヤ
といふ國の一部にして開闢以來初て交
易を開きたるを以て昔より名高き所なり
新て古の時は主小飛乱といふ者ゆ
ゑ蘇魯門王古きと條約を結ひて年々
小麦と水油とを輸りて樅檜などの材
木類と交易して彼神厳建立の用に費
し多くハ材木をタイレより取寄せそ

れし其外石瓦かしとも勝しく用意して
神厳を建しめけるに其間口十二丈
奥行三丈五尺高四丈五尺あり境内甚
廣くして附屬の建物數多あり総建坪
一千二百十坪ありといふ然れとも此の
建物は結構して美觀なるとは如何
なる巧の筆にも記しつねたりとゝへ
り扨又内は拵そ此上もなき結構なる

木品と用ひ壁ハ天人天女の美しき
姿を彫り壁ハ床も半ハ黄金を鏤
たり此神殿を建つるハ七年にして
漸く成就しかりしい人是を世界開
闢ハ後およそ四千年して西洋紀元
より一千年も前の事なりと云ハ今茲
明治六年より九三千年も前なりと
唐土にて周の初　我朝にてハ地神

の御代なるへし斯て蘇魯門ハ神殿成
就ハ祝として以新来爾國中の文武ハ
官員をいふも更なり老人名家を呼集
て大會を催すハ僧人等ハ大なる
船を待来りて献上しけるハ其内ハ石
の机二脚ありて是ハ四百年以前漠設斯
天より授かりあるる机なりと云傳へ
ハ此船を神殿の内神に入れ黄金にて

作りとる天人れ大なる翼の上に据置るに忽ち靈雲起りて神殿に入るとと思に聞もかく内陣に満ち塞りけるに其時天神の降臨まします言傳へ去程に蘓魯門王とその神殿を建立てより其名誉たうく外國までも蘓魯門王の智略を賞しまれも斯波といふ國の女王を蘓魯門王を訪ひんとして其國を立出て以斯来爾に来りゐるとそ柳古の斯波といふ國を亜弗利加洲の内にありて埃及國より南の方に當れりといふ彼女王を以斯来爾の都なるゼルセレムに来りて國王蘓魯門に對面し其容体を視るに黄金を鏤めるる大なる象牙の椅子に腰を打掛け黄金

造の基を足ふ踏て椅子の左右ふは又黄金造の獅子を置きたり斯く羨覆し き物を飾り附きれを蘇魯門王の威儀を益尊く見へ出るよそ斯波の女王を蘇魯門こう華美ふる飾ふ眼を驚こうしふる内ふ又其淡泊を聞ふは智略も凡人ふ勝らさきハ女王を愈驚きて中々ふ蘇魯門の徳を一時の對面ふてハ知る

と叶ずと感ふ堪てそ帰りける凡世の中何事も満きは缺くる習ふて音ふ響きし智畧ある蘇魯門も驕奢ふ長せし餘りや不圖変心して天神を祭ること忽廃て偶像を信仰し初ふり是迄賢明正道王ふて霊験ふりし神殿をも建たるふ偶像ふ遠ひてより又高大ふる寺を建立して頻りふ像教を信心しけ

りといふ是等の神祇よりのうんこの子孫長く國を保つと雖ハす蘓魯門王俎うりて後を太子烈保梵王讓りしより國民多く背きてされよ從ハさりしといふ実よ天道恐るへ慎しむへし

新来爾國滅却の事

附後世外國より管轄を受る事

去程よ蘓魯門王を初の賢明ふ引うて邪教よ迷ひ終ハ金を以て雖とも救ハ王俎とうりてより太子烈保梵位ヨ即くるに斯来爾國十二部の内十部まてを兵を起し烈保梵王の命を拒みて從てされを僅よ其残二部を管轄しまる小一部を猶太といひ又一部を韓奢関といひ久きを國号を改めて猶太の王國と称しけり烈保梵王の不幸

を大方國を失ひしのみからもまた其上に埃及國王細西伯といふ者軍を引来りて猶太國を攻め其都ゼルセレムを取り神殿と王宮とを焚り財寶を殘らず奪ひて去りしとぃふ扨又烈保梵よ反きたる十部の人民い其以来別に國王を立て國号を以斯来爾の王國と称ーあるよ夫より代々の國王大抵

ハ悪ーき人ーして孫ま像教を信仰ーけり其都ハ廿マリヤといふ所よて王宮も政府を皆此處よあ里たり此國猶太ゟ別れて王國と別きてより凡二百五十年も立て亜西利國の王よサルマ子廿と言人ゟ以斯来爾國ゟ攻入て大よ敗ち以斯来爾人を殘らず捕へて本國亜西利よ連帰り奴隷ーて追使ひ

者るよ其後可難國よ遁れ歸りふる者僅よ二三人かりしていふ

茲ヨ獨太韓奢関の二部ようて各其後も久しく可難國よ住居して今獨斯と云

各即ち出の國かり昔の獨太國としいふ

言葉ハ轉ふるるしよも說たる

如く獨太王國の都ゼルセレムハ一且埃及王よ取らきたれしも其後各王

官や政府も獨ゼルセレムよ所りて代代の王ハ内よも有德かる人もあり君主と多くも天命ヨ背きて罪を作り或ハ偶像を拜むもありとそ孫よ獨太人ハ總て天命ヨ悖る者多ふりそれハ福災と受くるも示多ふり君りとして中よも西洋紀元前六百六年ヨ我神武天皇の御代ヨ当て天皇即位の後五十五

年乙卯のとし比叡倫の王軍を起し来りてゼルセレムを攻取り神殿を毀ち土地の人民を虜にして巴比倫に連行きゝるに殘の人々ゼルセレムを修復して衛く変に住ゝを八程ふく又巴比倫王の大將攻来りて再ひゼルセレムを圍く終に之を攻取りて悉く都を打毀ち何一つも建たる物ゝ

人を殘らず生捕らをして七十年の間巴比倫に留り居しり其内に波斯國王波留士といふ者巴比倫を攻取りて猶太人を釋し其本國に帰らしめ夫より猶太人を再ひ神殿を建て昔の教を学ひて古風に暮したるも國ハ波斯王の藩屏となり二百餘年を經て亜歴山德大王の時に至りしに大王を波

新と戰ひ一頃ゼルセレムを取らんと軍兵を率ひ進み來りぬるを善智識と老僧法衣を着し國中より夥多の信心者と引連れ出て亞歷山德大王を迎へ見て愁しき國情を說きけるに大王其實意を感し軍兵を和てゼルセレムの都を攻きりしとそ其より後も又二百年の間不度々諸國より攻腦まされ

ぬることあり其内よも埃及人に攻取き て其暴政を苦しめらき後又西利人より攻らき其屬國となりて又大に難儀しありといふ然とも西洋紀元前百六十六年よりも猶太國は大膳よマカベウスとて剛勇なる人あり西利人を追攘ひ國中の難儀を救ひ出るよ西利國王を笑よ怒りて自ら誓を立て悉く猶太國

の人民を打取んとて大急きして出陣し
ける途中にて馬車より落て死しあり
とそ夫よりマカベウスの子孫を猶太
國の王となり代々権威盛かりしら未
百年を満さしして名高き羅瑪の大将
反平といふ者に従ふ〳〵ら色々れも
反平を此國の政治をイドムといふ所
此人にてアンチペートルといふ者に

委せ置る日西洋紀元前三十七年即ち
今より九千九百年以前に至りて羅瑪
國の議官よりアンチペートルの子へ
ロットといふ者を命して猶太國王に任
ずあり西洋諸國にて信仰する法教の
祖師を此ペロット王の時と此國に生れ
たる人にして彼西洋紀元ハ祖師が生
年より数へて今茲一千八百七十三年

しかるをり然るとも此猶太國より猶
太教と唱へ別に法教ありて却て西洋諸
國の教に從はしに猶太教といふ法教も
世界に廣く行はるる教かるとも西洋
人此為には教の敵かるを以て西洋人
も大小共を賤しみて假令隣家
に住むとも交際せさる由なり法教の
為に愛憎あるも笑ふ可きなり

伊里亜天に登る事
附打尼児獅洞に入る事

抑平不立の人民繁殖してより以来代々
奇異なる人物ありて先知者と唱へ天
神の御告によりて未来の事を知ると
いふ和漢共に昔より言傳へある仙
人の行者の類にして素より信用なきも
のかあるにあらねとも其行跡頗る奇妙

て、孫しき話あまた其一二を揚けて此巻の終とし但し何ども佛家又ハ道士此説に似て怪異の説亦ども事変さる昔話なり扨亦此先知者と唱ふる者の肉ハ最も名高く聞へしハ其名を伊里亜とて人里遠き山中に獨居して稀に世に出て様々不思議の行あり自身の食物ハ常に鵞に贈らまゐるとゝ

或時阿破武といふ悪王ありて暴虐の行ありあるに伊里亜の云けるまゝ亦乃王悪虐無道亦ども其天罰にて王妃シセベルを犬に噛まれて死へしといるに其後果して王妃ハ犬に食まて死したりとそ又或時ハ軍に伊里亜を天火と呼ひて五隊の將士を焼殺しとりといふ又或時外套を脱きて「ジョルダ

こといふ河の流塞き道と燥うして
河を渡りたりといふ其外色々の奇怪
き事を行ひて後終に天上より火車を
呼下して之に乗り天に登りけると云
其時伊里亜の外套火車より落たる或
以利舎といふ者之を拾ひて之を後も
又名高き先知者とかりあるかん此話
を総て怪異き事なれとも太古いまと

世の開ざるときの事なれハ空言か
迷へる人の口より言傳へしとかるへ
夫より後打尼児といふ名高き先知者
ありし巴比倫王の巳んとを前より知り
て人に語りるよこと或聞傳へるる
者王に阿諛んうの為に其事を王に語
りて打尼児を讒言しるに王怒りて

打尼児を捕へ獅洞より投入ませ翌日往て見れども何も獅い側より居もと打尼児も逃げ少しも変る色も分けきは王を大に驚きて洞中より打尼児を引出させ讒言したる人を代り其洞に入れ帰るよ洞の底より届くと等しく獅を忽ち飛掛りて寸々に引擘きけるとうや是も不思議の話なれとも智あ

りて正しき人を蓄生と雖とも去きを害せし人を誹りて君に諛ふ悪人を獣よ喰きて非業に死を遂るも道理かる

西洋夜話第三集終

明治六年三月刻成

養愚堂藏版

京橋金六町　翰林堂

室町三丁目　中林堂　共發行

230. I
I 623
W